

第6回「婦人の書いた実話」入選

がむ

しやら人生



(最近の香川さん)

男を追って蒙古まで おしかけて行った花嫁さん

富山県 香川真子

香川真子さん 大正8年7月、京都に生まる。昭和11年、京都華頂岡女学。昭和20年4月結婚。現在、高校一年生と小学校四年生の二人の男子があり、ご主人は高校教師。

あるとき、工場を休んで、むさぼるように本を読んでいるところに、工場主任という、ヒゲ面がたずねてきて、いきなり「非国民」とののしって、弟の頭をなぐりつけた。そのあまりの乱暴さに、さすがの弟もかっとなって、思わずコブシをにぎりしめたようだったが、母にはげしく制止されて、わずかに怒りをおししめた。どんなに侮辱されても、なに一つ抗弁はできないのだ。抗弁すれば「非国民」のレッテルをはられて、まかりまちがえは生命の安全さえ保障されないからだ。

「もっと勉強がしたい。数学をやりたい。本を読みたい」というのが、そのころの弟の口ぐせだった。

そのころ、高等学校の理科に在籍していた弟は、学問らしい学問はなに一つ教えてもらえず、くる日もくる日も、軍需工場の「神武第百製作所」へ通い、木製飛行機を作らされていたが、家に帰ると、机に顔を伏せて泣いていた。

「もつと勉強がしたい。数学をやりたい。本を読みたい」というのが、そのころの弟の口ぐせだった。

思いで手に入れたものは、空襲を恐れずにならなっている。

昭和十九年の夏——といえ、打ちつづく戦争に、日本人のだれしもが、くたびれきっているときであった。B29爆撃機が、夜ごと日ごと、日本の空をわがもの顔に飛びまわって、鳥が糞でもするような無造作さで、ポトリポトリと、爆弾の雨をふらせ、街という街、家という家を焼きつづけていた。

私の住んでいた京都の街は、まだほとんど爆撃らしい爆撃は受けていないが、それもさうまでのごとで、あすはどうなるかわからない運命であった。

私たちがせつせと、路傍の空地や、家中の土間に穴をほった。空襲を受けたら、すべてをほったらかして、私たちはその穴の中にもぐりこまなければならぬ。

夜になると私たちは、小学校の校庭に集まって竹槍の訓練を受けた。上陸した敵兵を迎え撃つには、この竹槍がいちばんふさわしいという、上からのお達しだったので、そうだった。

一家の主婦は一人の例外もなく、一日じゅう、街頭に立ちんぼの行列を作って、「配給」を受けなくてはならなかった。八百屋の前で、三時間も行列して、ネギを二本とか、大根を半本とか分けてもらって、お次はまた魚屋の前に行列である。いままら猫でさえふり向きもしないような、くさりかけたイワシを三尾、サバを五尾、やつとの

夜ごと日ごとの爆撃

9月の歌 山椒の実赤く揚げをりくるしみを考へたりしはその実を受す 西岡貞香

勤め先の宗教新聞社に通っていた。ここでは日刊の宗教新聞を発行していたが、用紙不足のいまでは、日刊どころか、週刊もおぼつかないありさまで、坊さんも牧師さんも青息吐息だった。ただ特定の神主さんだけは、わが世の春を謳歌して、霊鷲いやちこな日本の神々のありがたきを、軍人そのもののけのたけだけしきで、書き立てていた。それに反発を感じた私は、わざわざ別途の取材をして原稿を書いたが、編集長はろくに目も通さずに、没にしてしまった。それで私は、仕事のゴシを折られたような気になり、毎朝、新聞社に顔だけ出すと、あとは東山や東福寺、または奈良や宇治などの、なるたけ人のいない古寺をたずね歩いて、時間をかせぐことにした。

すばらしい思いつき

私の家の近くの伏見桃山御陵の北側に、万聖敷と呼ばれる広い城址がある。そこはときどき練兵場に代用されるので、農作物も作られず、一面に雑草が生い茂って、そこに寝ころぶと、夏草のにおいがむんむんと、息もつまるほどであった。

遺出にあいた私は、家にも近いそこへ、ときどき出かけて行って、寝ころんだ。夏の日は強烈で、目がくらめくような思いをすることもあったが、外をうろうろ歩いていて、挺身隊にかり出されるよりはまし



しがなかった。手紙が遠ざかったという、ただそのこと一つのために、私の手足はじりじりと火に灼かれるような思いになっ

結婚式もしないで入籍

ろく。

だと思った。仰向けに寝ころんでみると、ときどき高い青空に、二すじ三すじの飛行機雲が、白いテープを投じたように、あざやかな軌跡を描いて、どこかへとんで行く。しばらくすると、サイレンがけたたましく鳴りひびき、ワーワーという街のどよめきが伝わってくる。それが私には、まるで遠い遠い、自分とは無関係のところで起こっているどよめきのようにしか思えない。

昭和二十年の三月も終りのころだった。太平洋戦争はいよいよその形相を深刻にして、敗戦の色はおおうべくもなく、日本人のすべての顔に絶望のかけを宿していた。

春の朝はまだ寒い。着ぶくれた旅装の私は、京都駅の改札口に立っていた。背のリュックには、母が奔走してとどめてくれた銀めしのにぎりめしが三十個も入っている。二つの大トランク、バッグ、洋傘、たいへんな荷物だが、チャキキがきかないのだから、手にもって運ぶよりしかたがない。「行けそうになかったら、すぐにもどってきてくださいよ」と、母は早くも泣き顔の表情。「やっばりやめてちょうだい。いまごろ蒙古に行くなんて、死に行くのと同じじゃないの」と、汽車のステップに足をかけるまで、口をそろえて引きとめようとする友達達の誰彼。そんな中で、弟だけが、口には出さないが、目顔で私に合図して、「姉さん、行っていらっしやい」と、力強くはげましてくれ

て行けばかならず会える相手ではないか。なんといううれしい思いつきだろう。いきなり頭をもたげた想念のすばらしさに、私は有頂天になって、むっくりと起き上った。私は一気に草原を駆けぬけて、わが家の玄関にたどりついた。「お母さん、私は蒙古へ行くのよ。行きたいのよ。行かせてね」息をはずませて、私が叫ぶように語るのを、母はあきれたように見送して、「あなたはまだ、蒙古へなんか、どうして行けると思うの？」と、たしなめるのだが、私はそれを耳にもかけず、「行けますわよ、行けますとも……」と、私はますます浮かれ立つのだった。

きく手をふるよ、大股に歩いて列車のステップにとびのつた。列車の中は超満員だった。荷物を運びこんでくれた弟が、私の耳にささやくようにして、「姉さん、どこに行っても、いまの日本よりましだよ。ほくの分まで、抑圧のない生活を送ってね」といった。

「できたら、あなたもつれて行きたいわ」私たちは、おたがいの肩を抱き合った。しかし、それも一瞬のこと。動き出した列車におどろいて、弟はあわててホームにと走り出した。過去は過去、私はただ未来に向かって奮進するだけだ。汗ばむほど緊くにぎりしめてある切符。北京行と印刷したこの赤い切符の一枚を求めて、私は二七カ月あまり、どれほどがむしやらに走りまわったことだろう。戦局も、どうやら峠を越したと思われるきまこのころ、一般の民間人が大陸にわたるものは、ほとんど不可能に近いことだった。まして私は未婚の娘だった。それが雲をつかむような理由をかかえて、危険な大陸にわたろうというのは、おとぎ話の冒険か、さもなければ自殺行為にひとしいことだった。

彼がどういう目的で、蒙古の草原地帯のダルハンキという寒村に出かけたのか、私はよく知らないが、そこへ行ってから満二年あまりというものは、彼は五日おきにかならず私へ手紙を書いてよこした。私は、最初、竜一が蒙古の草原で、ひとり暮らしのさびしさをまぎらせるために、ひんぼんに手紙を書くのだからと思っていった。しかし、それが半年たち、一年たつうちに、私の考えは変らざるをえなかった。竜一は、内地にいる多くの友人の中から、とくに私ひとりを選んで、求道の伴侶にしようとしていることがわかってきたからだ。

「二まつたことがあったら、その辞令を見せるといい。おまえさんの希望がききとどけられるだろうさ」と、その高官のおじさんは教えてくれたが、私には少々無意味だった。

私の高官の人は、私の願いを気軽に引き受けてくれて、あれほど狂奔しても入手できなかった渡航許可証と北京行の切符を、いともらくらくと都合してくれたばかりでなく、万一の場合には利用するようにといって、「北京梅機關勤務」という辞令まで手渡してくれた。梅機關というものが、なにをするところか、その内容については一言も説明されなかった。まさか梅の木を栽培する機関でもあるまい。「二まつたことがあったら、その辞令を見せるといい。おまえさんの希望がききとどけられるだろうさ」と、その高官のおじさんは教えてくれたが、私には少々無意味だった。

い。虎や、熊のいるジャングルの中に行くわけでもないから、とって食われることもないだろう。

野放図らしく見えても、私はやはり、まだうら若いお嬢さん。ともすれば行く先々のことが気になって、汽車にゆられながら、心はなかなか休まらなかつた。

飲まず食わずの旅

下関では艦砲撃を受けて一時退避を余儀なくされたり、釜山ではホームをまらちがえてうろたえたりしたせいとか、奉天へいまの釜山行の汽車にのって坐席におちつくと同時に、私はぐったりとしてしまつて、それから十数時間、死んだように眠りこんだ。朝鮮半島は夢にうなされながら北上したことになる。ガタンと、はげしくゆれる衝撃に、目をさました私は、網欄を見上げて愕然、厭気も一べんにふっとんでしまつた。なくなつていてではないか、母が死ぬほどの思いで調理してくれた銀めしのおにぎり三十個が、それを入れたリニックスバックごと、ぬすまれてしまつたではないか。私は呆然として、しばらくは口をきくこともできず、やがて心細くなつて、ペソをかいてしまつた。

周囲の人々は、気の毒そうに私を見守っているけれど、だれにとつても食物は大切なので、この見知らぬあわれな娘に、分け与えるだけの余裕はないにちがいない。私はペソをかきながら、自分はいま遠くハッゲも、消えてなくなつていく。私の体ひとつが残つただけで、荷物は全部なくなつてしまつたのだ。

一体、いつのまに、どうして空られたのか、その見当さえつかない。私が、こうして立っているフラットホームは、日本の京都駅ではなく、中国の北京駅だということを知り、私は骨身にしみて教えられた。

親切な中尉殿が、しきりに世話をやいてくれて、軍隊の力を借りても、ぬすまれた荷物をとりもどしてあげようといつてくれるのを、振りきるようにして、私は駅前の広場に出た。

なんともいえずさわやかで、身軽である。身につけていた一切の付属物を、残らず人にくれてやつて、真正正路の真子さん一人になつてしまつた。これから先、ダルハンキまでどれほどの距離があるかしらないうが、この旅の幸先は、あまりよくなさそう。

故国を離れて、未知の人たちの中にいるのだから、もつとしゃかりきになつてはいけないうのだから、自分に言い聞かせていた。

私の筋向いの坐席には、釜山からずつといっしょに、一人の青年将校が腰をおろしていた。彼はたいへんな食いしん坊で、空腹の私には目ざわりになるほど、たびたび弁当を食べていた。おいしそうな玉子焼、海苔巻、とぼろをかけたご飯など。

私はかさの上に文庫本を開いて、顔をうずめるようにして読書にふけつたが、ときどき鼻先を流れてくる奈良漬のにおいに、思わずむせかえるのだった。

そうした私を見かねてか、その中尉さんは、気をよかせて、おひとついかがですかと、海苔巻をすすめてくれた。ノドから手が出るほどほしくせに、私は、妙にこたわつて、すなおに手が出せなかつた。武士は食わねど高楊枝……などと、やせがまんを張りながら、じつと目をとじると、おすし、海苔巻、ぜんざいなどが浮かんで消える。

そんな食欲との苦悶をつづけながら、列車はいつしか鴨緑江をわたつて、やがて奉天駅についた。フラットホームには、苦力らしい男たちが、おいしそうないろいろの食パンを、てんでにかかえて歩いている。私は目まいがするほど食欲を感じたので、列車がホームに停止するのを待ちきれぬ思いで、ふかしたての、まだ湯気の立つている高粱パンを買い求め、大急ぎで北京行の急行にのりかえた。

善導大師という、中国のえらいお坊さんは、私たち人間は、火の川と水の川にはさまれた細い道を、とほとほと歩く旅人だといつていた。道の彼方に阿弥陀如来が、ここまでおいでと手招きしているのだから、火に焼かれ、水におおはれても、その細い道を歩かないではいられない。いまの私はその旅人だ。ダルハンキの草原の中から、手招きをされている竜一様のもとにたどりつきたくて、私は着のみのままの、あわれな旅をつづけてはならない。

森の都の修道院

さて、世の中はそれほど歩きにくい道ばかりでもないらしい。駅前で洋車をひろつて、友人の家をさがしてあつた私は、心からのあたたかい友情で迎えられた。彼女の夫なる人は北京新社会という政治団体に關係してるとかで、その政治力を利用して、

奉天から北京まで二十二時間、とにかくパンが買えたので一安心と、荷物を櫛に上げて、水気のすくない高粱パンにかじりついたとたん、「また、こいつしよですわね」と声をかけられて、ぎょっとした。またしても、海苔巻の中尉殿と向かい合つてしまつたのだ。

「お腹がへつたでしょう、無理もないですよ、朝鮮半島を飲まず食わずの旅でしたものね。しかし、高粱パンはまずいですよ、とも食えたものじゃない」

先さまはなにげなくいふつもりかもしれないが、その高粱パンにかじりついていた私は、思わずかあつとなつてしまつた。「私は軍人さんじゃございませぬから、これでもけつこうおしいゅうございませぬわ」と答えてやつた。さすがに彼もむつとしたりしく、だまりこんでしまつた。

私は、自分が根つからのイヤシンボだとは思つていない。食ふことは好きだが、けつしてむさぼつたことはない。ところがこの中尉さんは、食ふことだけがこの世のたのしみだと思つているのだから、移りゆく窓外の風景に目もくれず、よくもまあとあきれられるほど、無遠慮に飲み食いしていた。

北京についたとき、私は本能的にフラフラと、駅の売店にとびこんでしまつた。ジュースを飲み、なつめをかじり、肉まんじゅうを食べて、やっと人心地がついた。いまだにこれだけの食料品を、切符なしに自販機で買っている中国は、さすがに大きな国だ。

竜一様の消息をたしかめ、北京まで私を迎えに出るようにつらつてくれた。

竜一はそのころ、ダルハンキを引き払つて、奥地ではあるが人口の多い、厚和(へわ)とよという町の修道院にいらることがわかつた。もうすぐ竜一に会える。信じられないうれしさだったが、こう簡単に道がひらけると、冒険好きの私には、少々張り合いぬけの感じだつた。

私たちは、それから一週間後に、まる二年ぶりで再会した。あお黒くよんだ竜一の、ビタミン不足らしい皮膚の色を見つめたの、私の私さまはなんときたならしくなつたのかしらと、悲しかった。遠い東の国からの花嫁さまを迎えるというのに、ヒゲもそらず、ズボンの折目らしいものも見えない。こんな男性ではなかつたはずなのだが

ダルハンキに二年いるうちに、瘰癧病にかかったので、厚和に配置がえしてもらつたのだと、気重そうに語る竜一を、私はしきりに「こんな人じゃなかつたのに」と、胸の中でつぶやきつづけた。

私は、京都出発以来のかすかすの苦心談を、多少の誇張もまじえて語つたが、彼は気のない受けこたえをするだけであつた。お魚のように無感動な表情。こんな人だつたのかしら。

だなど感服した。

いくらですかと大きくと、六百円ですといふ。さあこまつた。私の胸算用では、せいぜい十二円くらいなのに、六百円とは吹きも吹いたりである。所持金は制限されて、ふところには二百円しかない。亮子は手を出して、なんだかわめいている。途方にくれていると、だれかがうしろから肩をたたいた。ふり向くと例の中尉殿である。

「あら、いいところで会つたわ。助けてくださいな。私、二百円しかもつていませんのよ」

「わっハッハッ……」と、中尉殿は愉快そうに笑つて、それでも気前よく立て替えてくれた。

「これからどうするのですか?」

大食漢だが、この中尉殿、見かけによらず親切者らしい。私はふと思ひ出して、オーバーの内ポケットから、例の辞令を出してみせた。すると中尉殿は、急に姿勢を正しくして、誓手の敬礼をした。

「梅機關の方ですね。それでは自分がご案内いたします」

急に改まった中尉の態度に、こちらが腹胆をぬかれてしまい、私はなんとなく「梅機關」がこわくなつた。

「けつこうですわ、私、ひとりでもいりませぬから……」

軽くお札をいって、改札口を出ようとした私は、足もとを見て、ふたたび愕然とした。ない。なくなつていく。トランクリも洋傘も、小籠にかかえてあるつもりのハンド

たのだと、気重そうに語る竜一を、私はしきりに「こんな人じゃなかつたのに」と、胸の中でつぶやきつづけた。

私は、京都出発以来のかすかすの苦心談を、多少の誇張もまじえて語つたが、彼は気のない受けこたえをするだけであつた。お魚のように無感動な表情。こんな人だつたのかしら。

とにかく私たちは、厚和へ出発した。蒙古地区の入口の張家口や、石仏で名高い大同よりもずっと奥地の厚和の町。中国人、トルコ人、蒙古人、白系ロシア人など、こつたな民族が二十万人も住んでいる都市、森の都と呼ばれるほど樹木が茂り、牛、豚、ラクダが町の中に放牧され、仕事のない男たちが往來の日だまりでのんびりシラミをつぶしている。厚和はそんな町である。

「ついたよ、さあ……」と、竜一にうながされて、私は洋車からとびおりた。目の前、見上げるようなレンガ塀にかこまれた

強力合成副腎皮質ホルモン デカドロン



赤ちゃんのしっしん・ぜんそくに
あまくてのみよい
エリキシル
20cc・100cc

眼・耳の炎症に
き、めの速い
臭眼・臭耳液
2.5cc

しっしん・かぶれ
かゆみに
素肌をまもる
クリーム
製造元 日本メルク万有株式会社
販売元 萬有製薬株式会社

大きな門。天主教哲学修道院の文字がくつきり浮かび上っている。のぞき窓から顔を出した老人が、竜一をみとめると、愛想よく笑って門をあけてくれた。

広い前庭、茂った樹木のさわやかな葉すれを通して、白いスレート屋根の家がいくつも見える。竜一はその大きい建物の中の一室に私を案内すると、院長に報告して行くといって出て行った。

この中に二百人の若い修道士たちが住んでいるというのに、まるでウソのように森閑としていて、なんの物音もしない。私はそっとあたりを見まわす。二十畳ほどの広い部屋だが、その片すみに本棚と机と、粗末なベッドがあるだけの、殺風景なほど簡素な部屋である。

ここがこれからの私たちの生活の本拠になるのかと思うと、ひとりどりに苦笑が浮かぶ。本棚から一冊の厚い本をとり出して、そっとおいをかいでみた。机をなでてみた。壁にぶらさげられているコートにさわってみた。竜一のおいまでの生活ぶりを、私は、この皮膚でじかに感じようとしていた。

「なにしているの？」
いつのまにかもどってきた竜一が、不思議そうにまなざしで、じっと私を見つめていた。はじらいが、一瞬、私の体をすくませる。

「疲れたらう、坐ったらどうだい？」
「いや」と、私は思わずスネてみせて、そのまま立っている。そのくせ私は、まだ汽

車にゆられているように重心が定まらないで、板の間が動くような気分だ。

竜一はだまって、タバコに火をつけた。淡い煙がほのかに二人の間を流れる。長い沈黙。いつまでも、こうして立っていても、もはや二人の間には、何干の距離はない。手をのばせば、すぐにも抱き合える距離でしかない。

突然、予期しない涙が、私の頬を伝って流れはじめた。目の前の竜一の姿が、ぬれて、ぼやけて見える。竜一の右手が、やさしく私の肩をつつむ。

「ほんとに、たいへんだっただろうね、よく来てくれた」

ああこの言葉、私は竜一のこの一言がきたかかったのだ。急にうれしさがこみ上げてくると、目まいがして、そのまま板の間に、どきりと倒れてしまった。

草原の中のダルハンキ

修道院は、原則として女人禁制だ。それで、私たちは、神父館を引き払って、門の近くの棟に移った。そこは、神父や学生たちが、外来者と面接する部屋に隣り合った、八畳二間と台所のついた、小さな建物だった。

壁をぬりかえたり、床にアンペラを張ったり、戸棚や洋服ダンスを備えつけてみると、私も小さな岩の女主人のような気になった。

はじめの一月あまりは、修道院の隅に、じないが、みんなて共有する自由の喜びが、私にはたまらなくうれしかった。

しかし、ここは日本ではなくて蒙古である。修道院から一歩外に出ると、敵意にあちた無数の視線が、日本人の私たちを射すくめる。日本の敗戦はすでに決定的といつてもよい。竜一はいつ召集されるかわから

夫が食事の用意をしてくれたが、いつまでも人手にたよってばかりはいられない。これでも私は花嫁さんなのだから。

私は竜一にせがんで、鍋、釜、お皿、調理台など、一通りのものを買ってもらい、ある日、一大決意のもとに、ご飯というものを、生まれてはじめてたいてみた。

お湯をグラグラ沸騰させた中に、洗いたをさらさらと流しこみ、石炭をじゅんじゅんとした。私の計算では十分以内に、白いご飯がふくらんできたはずだったが、第一回は見事に失敗、こげくさいお米の黒焼ができてしまった。

ここで私は、郷里にいたころ、母がよくきかせてくれた言葉を思い出した。「はじめめチヨロチヨロ、中パツパ、赤子が泣いてもフタとるな」——そうだ、あの要領だ。私はもう一度、この要領を試してみた。しかし、けっきょく、私は炭のようなご飯しかたけない女であることを、実証してしま

すると竜一は笑いながら、私の手からお釜をとり上げて、なにやらゴソゴソしていったと思うまに、まるで手品のように、白いふくらんとしたご飯をたいてくれた。おかげで花嫁さんの面目はまるつぶれ。竜一はこの技術は、ダルハンキでまる二カ年、自炊生活をして暮らしたたまものにはちがいない

この修道院はベルギー系の天主教の教会で、建物も西洋風の明るいもので、大きな農場や牧場をもち、また自家発電の装置も

ある日、一人の蒙古人がたずねてきた。ジムトルチという名前の、ダルハンキの住人だった。あざやかな日本語で、旦那が奥さんをもらったときいたので、招待に来たのだという。

「ありがたう。しかしいまはほくたちは、どこへも出かけられないのだよ」と、竜一が答える。

「バクシー、ただの三日でいいですよ。そうすりゃ奥さんは、バクシーが二年間も暮らした包を見ることができるとはいいです。かして、なかなか熱心だ」

私はジムトルチ氏の、日本人そっくりのおだやかな顔をながめているうちに、むしようにダルハンキへ行ってみたくなった。もともと私は、ダルハンキを目ざして、日本を出発したのだった。蒙古の大草原の中で竜一と暮らしてみたくて出てきたつもりが、ついこの京都の延長みたいな厚和の町に腰をおろしてしまつたので、私はどうしても、ダルハンキに行ってみたくて、竜一にせがんだ。

竜一もしかたなく、それでは四、五日だけだぞと、念をおして、腰を上げることにした。私のこの強引さ、こうと思つたら、どうしても、自分をおし通さずにはいられないがむしやらさが、われながらおかしかった。

丘陵のはてに沈む太陽

あって、みんな近代的な生活をしてきた。院長の常守義先生をはじめ、十人の神父さんは全部パチカン大学出のインテリぞろい。二百余人の学生たちも教養高く、礼儀正しく、朝夕の祈りをおこなう人たちがあつた。

大東亜省という日本のお役所は、この教養高い紳士方に、日本流のいろはを教えようと思つて、竜一を現地に派遣したらしい。しかし竜一は、私の見るところでは、きわめて職務怠慢の教師であつた。

毎日、きまつた時間に神父館に出かけるのだが、それはお茶のご馳走にあずかるためだったらしい。教室では、「アウグスティヌスの箴言集」などについて、学生たちと論じ合っている。そしてひまがあれば、畑の耕作に余念がないようだ。

夜は夜で、彼は自分の勉強のために、彼岸の世界への「浄土教の研究」だのという仏教の本を読んでた。大東亜省は、この非常時に、そんなつもりで竜一を特派したのであるまい。

よく熟れたアンスの実が、甘ずっぱいにおいをただよせははじめる七月のはじめ、修道院も夏休みになって、先生も学生も帰郷し、広い院内には辺地の学生が二十人ほどと、老門番の張先生と、私たちが残ることになった。

みんな毎日、畑の水くみに精出した。雨がめつたに降らず、日光が強いので、ゆだんすると、畑がすぐ地割れする。私たちは二人一組になって、三十分の深い地下

陰山山脈にかかると、そこから岩はかりの山道を三時間、上りつめたところが武川という県城のある町で、そこから先は見わたすかぎりの草原地帯だ。実際は、草原というよりも丘陵と呼ぶべきだろう。白茶けた地肌

の丘陵が、地平線の彼方まで積み重なって、まことに壯観だ。

百霊廟でトラックをおりて、馬にのりかえる。ここは、ラマ教の本山で、三千人のラマ僧が修行しているそうだ。私にははしかし、ただきたならしい泥の建物とだけしか感じられなかった。

百霊廟を離れると、いよいよ殺風景なながめがつづく。もう建物もなにもない。丘陵の上に積み重ねたオボという石だけが、唯一の目じるしだ。わき目もふらずに馬を走らせる。オボがなければ、案内役のジムトルチ氏も、どの道を通つたらいいか、見当がつかないという。

同じような丘陵を、いくつもいくつも越えて、八時間あまり走りつづけて、目ざすダルハンキにたどりついたとき、私はもう疲労困憊、口をきく気力もなかった。

包のすみに、毛布にくるまってころがっている私にひきかえて、竜一はすこぶる元気だった。二年間の古果にもどりの、旧知の人々にかこまれて、私にはまるでわからないアクセントでしゃべりまくっている竜一だった。

ダルハンキに来て、私は改めて日本との距離を考えた。厚和の町は、その生活内容



蒙古包 モンゴールの人たちは、その生活のすべてを羊にかけている。羊は水と草を求めて移動するので、人々もそれに従って移動する。包は蒙古人の移動キャンプである。

婦人の書いた実話の人気投票

▲入選実話がぜんぶ発表済みになったところ、五話のうち、どれがいちばんよかったですか、みなさまの人氣投票を募集します。
▲その投票規定は、十二月号の「主婦の友」に掲載しますから、ご注意ください。賞品がいろいろあります。

- △お母さんいつまでも若く 稲葉 政枝 (東京都)
- △がむしやら人生 (八月号掲載) 香川 真子 (富山県)
- △アメリカ生れ 小林 勢子 (東京都)
- △愛はためらわず (八月号掲載) 酒井 信子 (埼玉県)
- △かわいいブラジレイロ 松山 弘子 (ブラジル)

どれがいちばんよかったか?
ぜんぶ掲載後に懸賞募集します

翌日、私は領事館の人々といっしょに張家口行の汽車にのった。ここには日本人が

「ここに私たちの赤ちゃんがいるのよ」「エッ」といったまま、竜一の顔には複雑な表情が浮かんでいた。
「ここに私たちの赤ちゃんがいるのよ」
「エッ」といったまま、竜一の顔には複雑な表情が浮かんでいた。

「ここに私たちの赤ちゃんがいるのよ」
「エッ」といったまま、竜一の顔には複雑な表情が浮かんでいた。

乞食になっても生きぬく

翌日、私は領事館の人々といっしょに張家口行の汽車にのった。ここには日本人が

「ここに私たちの赤ちゃんがいるのよ」
「エッ」といったまま、竜一の顔には複雑な表情が浮かんでいた。

「ここに私たちの赤ちゃんがいるのよ」
「エッ」といったまま、竜一の顔には複雑な表情が浮かんでいた。

流れに身をまかせる生活

二日後の入隊命令なのに、修道院には院長さんも神父さんもない。万一日にはかならずかまわなければならない。院長さんが留守なのでは、私はどうしていいかわからない。

二日後の入隊命令なのに、修道院には院長さんも神父さんもない。万一日にはかならずかまわなければならない。院長さんが留守なのでは、私はどうしていいかわからない。

二日後の入隊命令なのに、修道院には院長さんも神父さんもない。万一日にはかならずかまわなければならない。院長さんが留守なのでは、私はどうしていいかわからない。

選者のことば

「ここに私たちの赤ちゃんがいるのよ」
「エッ」といったまま、竜一の顔には複雑な表情が浮かんでいた。

「ここに私たちの赤ちゃんがいるのよ」
「エッ」といったまま、竜一の顔には複雑な表情が浮かんでいた。

「ここに私たちの赤ちゃんがいるのよ」
「エッ」といったまま、竜一の顔には複雑な表情が浮かんでいた。

選者のことば

「ここに私たちの赤ちゃんがいるのよ」
「エッ」といったまま、竜一の顔には複雑な表情が浮かんでいた。

「ここに私たちの赤ちゃんがいるのよ」
「エッ」といったまま、竜一の顔には複雑な表情が浮かんでいた。

「ここに私たちの赤ちゃんがいるのよ」
「エッ」といったまま、竜一の顔には複雑な表情が浮かんでいた。

選者のことば

「ここに私たちの赤ちゃんがいるのよ」
「エッ」といったまま、竜一の顔には複雑な表情が浮かんでいた。

「ここに私たちの赤ちゃんがいるのよ」
「エッ」といったまま、竜一の顔には複雑な表情が浮かんでいた。

「ここに私たちの赤ちゃんがいるのよ」
「エッ」といったまま、竜一の顔には複雑な表情が浮かんでいた。